

2021年度 第2回 ライフステージ事例検討会 報告書	
日時	2021年7月6日(火) 17時45分～18時45分
開催施設 参加者数	金沢大学0名、富山大学0名、福井大学2名、金沢医科大学3名、石川県立看護大学6名、信州大学3名、 金沢赤十字病院0名、公立能登総合病院0名、金沢医療センター0名、 公立松任石川中央病院4名、石川県立中央病院8名、 富山県立中央病院2名、富山県済生会富山病院8名、富山県済生会高岡病院0名、厚生連高岡病院0名、 黒部市民病院3名、富山市民病院3名、富山赤十字病院1名、 福井県立病院8名、諏訪赤十字病院4名、飯田市立病院0名、松本協立病院2名 <u>会場参加 計 57名</u> その他 個別のオンライン参加 計 73名 合計 130名
テーマ	「抗がん剤と医療用麻薬を内服している患者の自己効力感に着目したセルフマネジメント力を高める支援」
<p>〔意見交換内容〕</p> <p>1. A病院では、放射線治療に放射線治療日誌を用いている。治療日誌を見ながら患者と振り返りができる。放射線治療での腸炎を起こした場合、プリストルスケールを用いて、排便状況の把握、指導を行ったり、寒暖表を用いて症状コントロールの状況を把握している。患者は、日誌に看護師からのコメントがもらえると嬉しくモチベーションも上がっている。振り返りが患者の自己効力感を高めることにも繋がる。プリストルスケールの使用は他の病院でも分子標的薬の有害事象時の排便コントロール時に使用している。</p> <p>2. セルフマネジメントの成功体験が素晴らしい。相反する気持ちのバランスが上手く取れているのがいい。患者自身がバランスを取れていれば、看護師は見守る。見守り、寄り添うことは大事なことである。例え、患者がNRS4～5が普段、NRS7～8が疼痛が酷くアウト、この状況を患者がそれで良いとしているのであれば、医療者は見守ることが必要。</p> <p>3. 患者との濃厚な関わりができていた事例であった。疼痛日誌を活用しようと思ったきっかけは？という質問に、緩和ケアチームの介入により、セルフマネジメントが必要となる患者には出来るだけ疼痛日誌を用いてもらっている。もともと病状や日記を広告の裏などに書いており書くことが好きな患者であったと回答。</p> <p>4. 書くことが苦手な人や、良くなかった事例はあったかという質問に、入院中、病状により自分で書くことが出来ない患者の場合、看護師が代筆することもある。なかには苦痛を抱える中、「こんなもんやっとなれるか」という患者もいた。人生の最終段階にある患者には、非言語的なメッセージをスタッフ間で共有していたと回答。人によっては苦手な人もいるが上手に使い分けている。</p> <p>5. C病院では、ケモ室でケモ日誌を用いセルフモニタリングをしている。</p> <p>6. 日誌の記載など苦手な人への対応を、薬剤師や他の医療者がセルフマネジメントを高めるにはどうしていくべきかが今後の課題となる。</p>	
ミニレクチャー	「セルフマネジメント」 佐伯 千尋(金沢大学附属病院 がん看護専門看護師)